カトリック教報

カトリック長崎大司教区
広報委員会
〒852-8113
長崎市上野町10-34
カトリックセンター内
TEL 095-843-3869
FAX 095-843-3417
振替口座 01880-5-2699
発行人
大水文隆
印刷所
株式会社 藤木博英社

In memoria aeterna erit justus

主に従う人はとこしえに記憶される（詩編112:6）

ユスト高山右近、列福

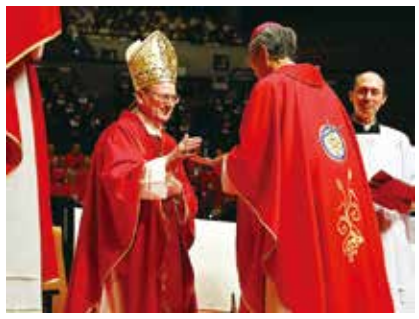
記念日は2月3日に

ラテン語を中心としたミサに、約千人の聖歌隊が奉仕

昨年1月21日に教皇フランシスコが殉教者として列福を承認したユスト高山右近の列福式が、2月7日（火）正午から大阪城ホール（大阪市）で開催された。全国から集まった約1万人の人々は右近列福の喜びを分かち合った。

教皇庁国務省主催による式典は教皇代理アンジェロ・アマート枢機卿（教皇庁列聖省長官）が主司式を務め、マニラ大司教のルイス・アントニオ・タグレ枢機卿と駐日教皇大使ジョセフ・チェノットゥ大司教、また、高見三明大司教（日本カトリック司教協議会会長）、前田万葉大司教（同副会長）ら日本の司教団と、韓国から6人、ベトナム、ルクセンブルク、カンボジアから各1人の司教ら計30人、司祭団約300人が共同司式した。

あわれみの賛歌後に行われた「列福の儀」では、始めに岡田武夫大司教（東京教区）が列福を請願。列聖申請者のアントン・ヴィットヴェル神父（イエズス会）が右近の略歴を紹介した。その後、アマート枢機卿が列福を宣言する教皇書簡をラテン語で朗読し、列聖申請者補佐の平林冬樹神父（列聖推進委員会秘書、イエズス会）がその日本語訳を読み上げた。



主司式を務めたアマート枢機卿（左）

「1615年にマニラで殉教した神のしもべ、ユスト高山右近を私の使徒的権威によって福者の列に加えます。宣教師を助け、保護し、十字架につけられた主を死に至るまで証ししたこの殉教者の記念日は、法令の定める場所と形式に従い、毎年2月3日に祝うことにいたします」

宣言後、鐘の音が鳴り、福者の肖像画（三牧樺ず子さん制作）が除幕。聖歌の中、祭壇近くに右近の聖遺物（スペイン人宣教師から贈られたとされるチョッキの一部）が安置され、アマート枢機卿が献香し、崇敬を表した。

402年前、追放先のフィリピン・マニラで病死した高山右近。アマート枢機卿は説教の中で、右近の死を悼む人々の悲しみは大きく、日本の気高いキリスト者の徳と聖性によって人々が感化を受けたことについて触れ、「In memoria aeterna erit justus（主に従う人はとこしえに記憶される）」との詩編（112・6）の言葉をあてた。そして、「私たちの福者が教会とすべての信者に何を残したのでしょうか。それは、偉大な信仰の宝です。ユストの信仰は、その存在の核心をなすほど成熟していました」と語り、「殉教者は、（中略）友愛と慈愛を告げる確かな使者です。ユスト高山右近の列福は、神がその摂理によって日本と世界の教会の中に蒔く種なのです」とたたえた。

長崎から式に駆け付けた信徒の一人は、「列福まで長い道のりだったが、一番ふさわしい時代に与えられた福者だと思った。国や世代を超えた人々とのつながりをも感じる式に参加できたことを心から感謝したい」と語った。

翌8日（水）は大阪カテドラル聖マリア大聖堂（玉造教会）で列福感謝ミサが行われた。長崎教区では12日（日）浦上教会で、各教区でも福者の誕生を喜び、ミサがささげられた。

求められる指導力の向上

「ハラスメント」をテーマに司祭研修会

2月6日（月）午前9時から正午まで、大司教館で司祭研修会が行われた。

第一部は、長崎教区で4月に開設される「子どもと女性の人権相談室」担当デスクの任に当たる福田真理氏が講師を務めた。相談室設置の経緯は既報（本紙2月号1面）のとおりであるが、教区では①問題の全体像を把握する「対応委員会」、②事実関係を客観的に調整する「第三者委員会」、③相談や訴えを受け付ける「相談室」の体制となる。講師は、パワー・ハラスメントとセクシュアル・ハラスメントを法律の観点から説明。司祭は上下関係を作る傾向にあるため、人権意識を高めると同時に、コミュニケーション能力と指導力（質問型指導のコーチング法や指示型指導のティーチング法などの使い分けとバランス）の向上が必要との指摘があった。

遺言書を作成する第二部では、教区会計の岩本繁幸師が説明、司法書士の池田國廣氏が補佐する形で進み、司祭たちは効力のある遺言書を作成、提出した。小教区の通帳が主任司祭名義（「宗教法人カトリック長崎大司教区」の記載がないもの）になっている場合、個人の財産とみなされるとの注意もあった。

指導法転換の必要性を語る福田氏

福者右近に学ぶ奉献生活

純心聖母会で初誓願式

2月11日（土）純心聖母会本部聖堂（長崎市三ツ山町）において、初誓願式が行われた。ミサは高見三明大司教主司式のもと、初誓願者と関わりのある十数人の司祭による共同司式でささげられた。

前日から日本列島の上空に強い寒気が流れ込んだ影響で雪が降り、恵の丘一帯は銀世界であったが、参列した家族や会員たちの見守る中で、一人の修練者が初誓願を宣立し、聖堂内は感謝と賛美の祈りに包まれた。初誓願を宣立したのは、早岐小教区・川棚教会出身の市瀬めぐみ修道女（修道名はマリア・アスンタ）。

感謝と決意を述べる市瀬修道女

高見大司教は説教の中で、7日に列福されたユスト高山右近の、時代を超えて価値ある生き方について言及し、右近が日々の祈りと霊操を深めることによって神を証しするための力を得ていたことから学ぶようにと、祝福のうちに初誓願者を励ました。

式の終わりにあいさつした市瀬修道女は、志願生となった中学1年生からこれまでの間、祈り支えてもらったことへの感謝と、奉献者として神の愛にとどまり、出会う人にその愛を分かち合っていきたいと決意を述べた。

これまでの支援に感謝

シナピス会、25年の活動に幕

25年前、県北の地で誕生した「長崎愛の奉仕団シナピス会」は、信徒の自発的な宣教活動から生まれました。当時フィリピンで宣教活動されていた聖母訪問会のシスターから相談を受けたのを機会に、フィリピンの「恵まれない子どもたち」を支援していく事が決まりました。会員には月額200円（一口）を献金していただきました。

日本の修道会が次々と引き上げる中、ネグロス島のバコロドでは、善きサマリア人修道会の協力で、さまざまなプロジェクトを立ち上げることができました。中でも教育の必要性が求められ、奨学金で子どもたちを支えようと、幼稚園の建設に取り組みました。マニラでは神父様が窓口を務めてくださり、主に大学生を中心に支援しました。卒業後は教師や技術者になる学生が多いです。2年に一度の支援地訪問では、現地の環境が目に見えて良くなっていくのが分かり、喜び合いました。

しかし本会も、会員の高齢化と世話人の後継者不足という現状にあります。会計の黒崎隆一氏が2016年2月に急逝され、なかなか後を引き受けてくださる方がありませんでした。世話人会では、会を閉じる潮時ではないかということになりました。

長い間シナピス会を支援してくださった方々に、深く感謝申し上げます。本会は3月で幕を閉じますが、今年の夏には最後の支援地訪問を考えています。

会長　山口瑞代

今こそ 信仰の証しを

結城了悟師の記念碑を祝福　日本二十六聖人殉教祭

約1,300人が集った西坂の丘

2月5日（日）14時から西坂公園で日本二十六聖人殉教祭（教区主催・長崎南地区評議会担当）が行われ、各地から徒歩などで集まった信者たちが、高見三明大司教司式によるミサに参加した。

説教師を務めたレデンプトール会の井田明師（愛宕主任）は、この日の福音（マタイ28・16～20）について「（イエスの）宣教命令は、単に11人の弟子に対してなされたものではなく、世の終わりに至るまで継続されるべき教会の使命でもある」と述べ、多くの苦難を伴ってきた教会の福音宣教の歩みを振り返った。そして、「私たちも今こそ、祈りと生活を通して信仰を証しするよう求められているのではないか」と呼び掛け、私たちが現代世界に対して神の愛と信仰の喜びを伝える証し人となるよう、二十六聖人の取り次ぎを求め祈りを願った。

ミサに先立ち、日本二十六聖人記念館前では初代館長だった結城了悟師（イエズス会）の記念碑の祝福式があり、高見大司教、長崎歴史文化協会の越中哲也理事長、現館長のデ・ルカ・レンゾ師（3月からイエズス会日本管区長）らが除幕し、多くの信者が見守った。

結城師の記念碑

人事異動・任命

（　）内は前任地

▼イエズス会（3月1日着任）
デ・ルカ・レンゾ師
日本管区長／東京・岐部修道院（日本二十六聖人記念館館長／福岡長崎共同体の院長／二十六聖人修道院）

松村信也師
長崎共同体の院長補佐／立山修道院（立山修道院）

山内保憲師
福岡長崎共同体の院長／福岡修道院（福岡修道院）

アントニオ・ガルシア修道士
日本二十六聖人記念館館長／二十六聖人修道院（二十六聖人修道院）

高山右近列福へのカテケージス ⑦

ユスト高山右近という生き方

― 教会の悩みは、私の悩み ―

列聖推進委員会　古巣 馨

◆空席を拭う人

留五郎さんは、司祭館の勝手口から出入りする小さい人でした。「つまらんもんですが、置いていきますぅ。」ボソッとつぶやく言葉とは裏腹に、白い発泡スチロール箱には釣りたての旬の魚が躍っていました。大風や大雨の後先に、いの一番にお御堂を見回る人でした。休暇を終えた神学生や志願生を港に見送り、悩んだあげく神学校を後にした学生にそっと居場所を用意する。定まらない司祭への不満を一身に背負い、日和を見てそっとたしなめるのも留五郎さんでした。言葉は忘れましたが、お御堂の修理の寄り合いで、留五郎さんの一言がささくれたみんなの気持ちを一つにしました。なぜか、留五郎さんがいると最後は締まるのです。相次いで3人の息子を漁場で失いました。自らも右手の指が数本欠けていたのは、遠洋の漁師の頃、仲間を大しけで失ったときのしるしです。「若いのがとられて、年寄りが残って……。」空席になったお御堂のベンチをいとおしそうに拭うのも留五郎さん」と呼びました。みんなは彼を「宿老さん」と呼びました。25年ほど前、教会がまだ萎えた人を温かく包み、そっと癒やしていた時代の話です。

「都に入ると、水がめを運んでいる男に出会う」（ルカ22・10）。救いのみわざのしるしとなる過越の食事（ルカ22・7～13）とカナの婚礼（ヨハネ2・1～11）。福音書はその舞台の裏方に、水がめを運ぶ人を登場させます。言いつけられたことを黙って行う、なくてはならない人です。初代教会では、キプロス島生まれのヨセフがその役割を担ったのでしょう。だから、「バルナバ――慰めの子」（使徒言行録4・36）とあだ名で呼ばれました。

キリシタン初期、多くの宣教師は右近のあとを追っています。彼が、水がめを運ぶ最初の人だったからです。

◆司祭養成の裏方に

ザビエルの宣教から30年目、1579年7月、口之津港に入ったイエズス会巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノは、宣教師たちとの協議の末、日本人司祭の養成を決議します。協議は一度だけ、間を置かず翌80年には有馬と安土にセミナリオを、大分府内にコレジオを開設します。

天下統一を望む信長が、琵琶湖に突き出た安土山に壮麗な城を完成させたのは、79年のことです。城下には家臣たちだけでなく、各地から商人や職人を呼び寄せると、楽市楽座を施行し自由で斬新な町を創りあげました。京都のオルガンティーノや巡察師ヴァリニャーノは、信長の町に教会とセミナリオの建設を嘆願します。80年4月29日、信長は安土城の南に田を埋めさせると、そこを宣教師たちの土地として与えます（『信長公記』）。同年5月、右近も安土城下に土地を受領し、邸宅を構えることになります。

しかし、何よりもまず右近が願ったのは教会のことでした。教会とセミナリオの建設開始を知ると、築城の名手でもあった右近は、京都から4日の道のりもかまわず材木を運ばせます。高槻の家臣1500人を動員した工事は、わずか一月のうちに3階建てのセミナリオを完成させました。

日本人の司祭を養成する初めての試みは、まず苗代に籾を蒔くような地道な営みでした。最初の神学生を募る右近の姿が記されています。

オルガンティーノはある祝日に高槻の少年8人を招き、ミサが終わってから少年たちに召命の大切さを話し、神学生として一緒に学んでくれたらうれしいと伝えました。すると、少年たちはすぐさま入学の決心をしてその場で髪を切りました。少年たちの親は高槻の位ある身分の者で、子どもたちの突然の行動に驚き、オルガンティーノに猛烈な抗議を申し出たのです。困り果てた神父は、右近に調停を頼みました。右近は以前から司祭の召命の大切さをよく知っていましたので、すぐに親たちを集め、まず自分の家臣たちの中から将来神と教会に仕える最初の司祭志願者が誕生したことについてお祝いの言葉をかけました。そのうえで、セミナリオに入学する少年たちの食料として毎年米百俵をセミナリオに寄進すると言ったのです。右近の説得と約束で、親たちもようやく納得しました（1582年2月15日付、ガスパル・コエリョ書簡）。

新築されたばかりのセミナリオで学ぶ第一期生は22人（1580年10月20日付、メシア書簡）、そのほとんどが武士の子どもでした。その中には、右近が秀吉からの追放後、有馬で一緒に「霊操」を行い、その9年後、長崎の西坂で殉教することになるパウロ三木、元和の大殉教で証し人となるアントニオ三箇がいました。セミナリオ建設から神学生の募集、さらには運営と維持管理、右近には日本人司祭を育てるための特別な思い入れがあったのです。この教会が成長するためには、派遣された宣教師から自前の日本人司祭への移行が不可欠だと感じていたのです。

しかしその2年後、安土のセミナリオは本能寺の変のあおりを受け焼失します。焼け出された神学生と司祭を引き取った右近は、高槻にセミナリオを移すと、越前北庄から戻った父ダリオをセミナリオの管理者にあて、司祭養成を支援していくのです。右近は建物や運営だけではなく、神学生養成の講義要綱にも影響を与えていたと思われます。「順応・適応の精神」をもとに進められた宣教司牧と司祭養成は、茶の湯や和歌や能楽に通じた右近の助言があったことは明らかです。右近自身、コレジオで日本独自に編纂印刷された多くの書物を得て、生涯キリストを学び続けた信徒でした。

右近から250年後、再び司祭養成が始まったとき、忙しく立ち回る浦上の信者たちと右近が重なります（F・マルナス『日本キリスト教復活史』参照）。自前で司祭の召命を生み出す教会は、未来を育む人のように躍動的です。そこにはいつも、あのカナの婚礼で水がめを運んだ僕たちがいるのです。自分のためには何も残さず、気前よく生きる人の理由はイエスの福音です。今も続く司祭養成のための信徒の活動、その始まりに右近がいるのです。

◆教会の良心に

右近は身内からは「教会の柱石」、為政者からは「伴天連の大旦那」と呼ばれました。単に教会の擁護者、宣教師の相談役だったからではありません。右近は風向きをよみ、ときに踏み外す宣教師をいさめる信徒だったからです。キリストを慕い、キリストに従う人にとって、教会の悩みは自分の悩み、教会の喜びは自分の喜びなのです。

1586年5月4日、新任のイエズス会準管区長コエリョは、大坂で秀吉に謁見を願いました。秀吉は諸大名が居並ぶ中、謁見の間でコエリョとオルガンティーノら神父4人、ロレンソ了斎やキリシタンの諸大名ら総勢35人余りの教会側一行と会見します。そのとき右近は先導役をつとめ、通訳にはフロイスが就きました。秀吉の歓待ぶりは臨席した大名や教会関係者を驚かせるほどでした。秀吉の厚遇に気をよくしたコエリョは、交渉術をわきまえた商人のように、キリシタン諸大名が秀吉の配下につくこと、秀吉の朝鮮と明国へ出征の際にはポルトガルから大型の軍用船2隻を調達するとまで提案したのです。傍らにいた右近とオルガンティーノは、このきな臭い話題を変えさせようと通訳のフロイスに耳打ちしましたが、彼はその助言を聞くことなく、コエリョも秀吉の話のなかに巻き込まれていくのです。駆け引きは秀吉が一枚上でした。これが翌年7月、秀吉による伴天連追放令発布の布石となったのです。

思惑が外れたコエリョは、今度は腹いせとばかりにポルトガル・スペインの軍事支援のもとキリシタン大名を長崎に集結させ、秀吉との交戦を目論んでいます。小豆島から有馬に入った右近は、暴走するコエリョを厳しくいさめています。生き馬の目を抜くような戦乱の世に生きてきた右近は、うまくいきすぎる話にはみな裏があること、宗教が政治と手を組むことの危うさを誰よりも知っていました。このとき右近は、教会の良心となったのです。お上に媚びを売り、尻尾を振りだしたとき、宗教はその体をなさなくなっていくからです。篩にかけられた教会の苦悩は、右近の心の痛みでもありました。

◆水がめを運ぶ人はどこに

ユスト高山右近、ガスパル西 玄可、パウロ内堀作右衛門、ルイス甘糟右衛門、ミゲル助右ヱ門（加津佐）……高木仙右衛門、守山甚三郎、森 松次郎……眞田精一（浦上）、永田留五郎（冷水）。キリシタン時代から今日まで、日本の教会で記録された水がめを運ぶ人たちです。

初代教会で「バルナバ――慰めの子」と呼ばれた人は、日本では看坊、宿主、宿老、顧問さんと言い換えられました。その生涯をたどれば「きのうも今日も、また永遠に変わることのない方」（ヘブライ13・8）の似姿のように、彼らは揺さぶられてもぶれませんでした。水がめを運ぶ人は、率先する人、かかわり合う人、寄り添う人、実りをもたらす人、祝う人です（『福音の喜び』24）。いま長崎の教会で、水がめを運ぶ「慰めの子」はどこにいますか。

韓国・テグ大司教区で叙階式

長崎派遣のキム神学生、助祭に

後列に並ぶ7人の新助祭（キム助祭は左から3人目）

1月17日（火）午前10時からテグ大司教区のポモ準司教座教会で、チョ・ファンギル大司教の主司式により、助祭叙階式が行われた。高見三明大司教と宮原良治司教（福岡教区）も共同司式を務めた。

この日、助祭に叙階された7人のうち、キム・ボム新助祭は司祭叙階後10年の任期をめどに長崎教区へ、イ・ハンウン新助祭（上写真、後列中央）は同じく福岡教区へ派遣される予定。

叙階式には、長崎から司教総代理の山脇 守師、キム・ボム新助祭の長崎での所属となっている浦上小教区主任司祭の久志利津男師はじめ、計7人の司祭も参列した。式後、高見大司教と7人の司祭は、キム助祭の出身小教区の信徒約70人が昼食を済ませた市内の飲食店に出向き、主任司祭やキム助祭のご両親、信徒の方々と交流した。高見大司教は「来年の司祭叙階式には、今から少しずつお金をためて、ぜひ皆さんも長崎に来てください」とあいさつし、会場を沸かせた。

高見大司教の前にひざまずくキム助祭

長崎大司教区の要請に応えて、テグ大司教区はもう一人の大神学生を日本に送ることを検討、今年の福岡コレジオ入学に向けて準備を進めている。

〝主が歴史を導かれる〟

長崎キリスト教一致礼拝

キリスト教一致祈祷週間（1月18～25日）にあたり、カトリック長崎大司教区と長崎キリスト教協議会は1月28日（土）午後2時、カトリック大浦教会で長崎キリスト教一致礼拝を開催した。

宗教改革から500年にあたる2017年のテーマは、「和解――キリストの愛がわたしたちを駆り立てています」（Ⅱコリント5章14～20節）。参加者たちは和解と一致を願い、祈りをささげた。

約100人のキリスト者が参加

集いは高見三明大司教の主司式で行われ、長崎キリスト教協議会委員長の藤井清邦牧師（日本基督教団長崎古町教会主任）が説教師を務めた。藤井牧師は、1517年の宗教改革や浦上四番崩れなどの歴史を振り返りながら、分裂や対立をはるかに超えて、主が歴史を導いておられると語った。

代表してあいさつした高見大司教は、「同じキリストを信じている兄弟姉妹として、お互いに尊重し合い、認め合う関係を強めていくことが大事である」と話した。

あいさつする高見大司教

礼拝後、参加者たちは1階の信徒会館に移り、和やかな雰囲気の中、茶話会で親睦を深めた。

主を愛する人は、主の道を歩み続ける

（シラ2:15）

2017年は全国で69人の司教・司祭が、司祭叙階の節目を迎える。60周年（ダイヤモンド祝）は大分の平山高明名誉司教を含む12人、50周年（金祝）は森一弘名誉司教（東京）と押川壽夫司教（那覇）を含む25人、25周年（銀祝）32人。長崎教区内では次の方々。

金祝

感謝そして報恩を

イグナチオ　片岡久司神父

50年前、司祭叙階を迎えての心情を述べた時のことが脳裏に浮かびますが、それを表現するのに「感謝と報恩と」という言葉を用いたことをはっきり思い出します。

その時から50年を経て、司祭叙階金祝を迎えることになった今、その思いがさらに深くなったように感じられます。司祭叙階が神のお恵みと多くの方々の支えの賜だったのと同様に、叙階後の50年にわたる司牧と繋がる司祭生活も、神の力強い豊かな恵みと皆様の好意に満ちた支援なしには全く考えられません。深い感謝のうちに日々を送ります。

残念ながら、健康上の都合で引退し、報恩の心を司牧という役務では果たせなくなりました。それで、報恩は祈りで続ける心算です。

略歴　長崎教区司祭。1939年11月29日長崎市生まれ。浦上教会出身。67年3月16日大浦天主堂で司祭叙階。同年俵町助任、69年大野助任、71年大司教秘書、75年丸尾主任、78年馬込主任、85年平戸主任、86年浦頭主任、96年青砂ヶ浦主任・上五島地区長・教区顧問、2005年紐差主任、08年出津主任、14年稲佐主任。15年引退、大司教館へ。

神に感謝

ダミアノ　﨑濵宏美神父

「自分以外の何かの力が働いていた」とは、特別なことを成し遂げた時などによく使われる言葉です。叙階50周年を迎えた私も使わせていただきます。ほとんど取り柄のない人間が、50年間も司祭として過ごしてきた足跡を見つめたとき、こんな言葉を思い出しています。

家族や友人知人に加え出身教会の信徒の皆さんだけでなく、関わってきた学校関係者や教会。そして、ミサなどで訪問した多くの修道院のシスター方。さらに見知らぬ信徒の皆さん方が、ずっと祈り続けてくださったお陰であると固く信じています。

神様が携えておられるお恵みの籠の中に、多くの方々からの貴い犠牲やさまざまな捧げものが絶えることなく入り続けていたとしか言いようがありません。これからもお祈りください。感謝！

略歴　コンベンツアル聖フランシスコ修道会司祭。1940年8月16日五島市生まれ。浦頭教会出身。67年3月16日大浦天主堂で司祭叙階。68年西宮市仁川学院勤務、91年聖母の騎士学園理事長・校長、2009年コンベンツアル聖フランシスコ修道会管区長。現在、聖母の騎士学園理事長・校長、聖母の騎士東長崎幼稚園園長。

島の宣教師

マチアス　川上忠秋神父

私は島の宣教師でした。海をこよなく愛し、頻繁に潜りました。海底は孤独ではありません。まるで天国のにぎわいです。

野首天主堂。鉄川与助が手掛けた初めての煉瓦（れんが）作りの教会では、7軒の信徒たちが熱心に信仰を守り、肩を寄せ合って生きていました。過疎化の波にのまれ、天主堂だけが残されました。

殉教の地、牢屋の跡に教会を建てました。献堂式で里脇枢機卿様が仰せられました。「ここに眠る殉教者たちを聖人の位に上げたい。しかし教区にはお金がない。」一八八殉教者の列に加わる列福運動を展開したかった。

五輪教会。信徒たちは、古い教会を壊して新しい教会を作ろうと立ち上がりました。しかし市当局と九州大学の教授から、「保存してほしい」と止められました。そばに新しい教会を建てました。

ペトロの船で長崎の武家屋敷に入りました。深堀の丘の上に白亜の教会がそびえ立っています。道行く人を祝福しています。「私はこの道をゆく。茨多し、されど我が司祭人生に悔いなし。」すべては恩寵でした。

略歴　長崎教区司祭。1939年10月19日五島市生まれ。三井楽教会出身。67年3月16日大浦天主堂で司祭叙階。同年青砂ヶ浦助任、68年稲佐助任、70年小値賀主任、71年水主町主任、74年宝亀主任、80年浜脇主任、85年馬込主任、94年サバティカル（イタリア・ロッピアーノ）、95年大浦主任、2001年曽根主任、07年浅子主任、13年深堀主任。

銀祝

感謝

パウロ三木　岩崎晋吾神父

現在、下五島地区で司牧をさせていただいております。

25年前、最初の赴任地が同じこの島でした。久しぶりに見たこの街が随分と変わっているのに驚きました。25年の歳月がたち、人も街も変わり、時の流れを感じています。そんな中で自分は一体どのように変わってきたのだろうかと、あらためて考えているところです。

変わってはいけないものが変わってしまい、変えていくべきものがいまだ変わっていないようにも思っています。しかし、「本当に私でよいのでしょうか。」この問いが、いつまでも私についてまわっています。

大きめの制服を着て小神学院の門をくぐったあの時、自分が何も考えずに過ごしていたことを思い出します。勉強が苦手、運動も苦手、コミュニケーションも苦手、努力することも苦手、お祈りとは何か、何も分かっていなかったあの頃。当時に比べて成長したように思っても、足りないものだらけの自分がすぐ目の前にいることに気づきます。そして司祭叙階を前にした今、私は司牧現場に出ることの不安でいっぱいです。私にできるのか、私で本当によいのか、もっと適任者がいるのではないだろうか。

この問いに対して、「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ」（ヨハネ15・16）というイエス様の御言葉が私の背中を力強く押してくれています。そしてこんな私を直接に、もしくはお祈りを通して励ましてくださった多くの恩人方に、心より感謝申し上げます。自分では何もできないからこそ、多くの方の励ましやお祈り、神様の導きが私の支えになっていることを実感しています。未熟な私ではありますが、よき奉仕者として仕えることができますよう、これからも皆様のお祈りをよろしくお願いいたします。

司祭叙階を前にして
本当によいのだろうか

ペトロ　下原和希助祭

略歴　1988年3月18日生まれ。土井ノ浦教会出身。2000年長崎南山中学校入学、03年長崎南山高等学校入学、06年長崎純心大学入学、11年日本カトリック神学院入学。16年3月13日浦上教会で助祭叙階。

思えば遠くへ来たものだ

トマス　中田輝次神父

気が付くと自分の居場所に驚くことがあります。病人見舞いの途中迷子になり、病人に見つけてもらったことや、ボートで流されて帰れなくなり、助けられたことも。それでも遠くへ出かける興味と関心は尽きません。

振り返れば喜びも悲しみもあり、「出世払いだぞ」と言って出世したのに借金を返してくれない人も過去にはいました。うしろを振り向けばきりがありませんが、前を向けばいつでもまだ見ぬ未来です。支えてくださり、赦してくださり、今を歩かせてくださるすべての恩人に感謝します。

略歴　長崎教区司祭。1966年3月12日新上五島町生まれ。鯛之浦教会出身。92年3月17日浦上教会で司祭叙階。浦上助任、滑石助任、太田尾主任、馬込主任、広報委員長兼務、浜串主任を経て、田平主任。ここまで支えてくださった方は今も変わらず居てくださいます。感謝の気持ちでいっぱいです。

略歴　長崎教区司祭。1964年7月6日長崎市生まれ。飽の浦教会出身。92年3月17日浦上教会で司祭叙階。福江助任、大浦助任、滑石助任、マニラ・EAPI（研修）、浦上助任、土井ノ浦主任、水主町主任を経て、浦頭教会主任・福祉委員長。

司祭の青春

ミカエル　下窄英知神父

司祭人生のピークを『司祭の青春』と呼ぶことにしよう。ある程度経験も積み、気力・体力が充実し、司祭であることを自他ともに満喫できる日々。25年前、それは40歳過ぎにやってくるものと予想していた。できれば、五島か平戸の主任司祭。信徒と泣き笑いしながら活気ある小教区目指して邁進し、息抜きは釣りと司祭団との心温まる交流。まるで、ガリラヤ湖畔でのイエス様の宣教に加わっているかのようではないか。当時は50歳以降の司祭生活など思い描くことすらなかった。

司祭叙階25周年を迎えた今、気力・体力は衰えつつあるが、司祭人生のピークはこれからやってくると信じている。

略歴　長崎教区司祭。1965年7月22日新上五島町生まれ。土井ノ浦教会出身。92年3月17日浦上教会で司祭叙階。三浦町助任、出津助任、井持浦主任、カトリック中央協議会事務局、教区会計・教区顧問、広報委員長兼務を経て、教区事務局長・教区顧問。

お使いになるのは神様

アンドレア　髙田裕和神父

助祭叙階式の訓話で森司教様は、「今日の叙階はあなたに主導権があるのではありません。あなたがどんなに出来が悪くても、神様が望まれたのです。お使いになるのは神様です。必要なものは神様が整えてくださいます。すべてを神様に信頼し委ね、神様が思う存分使える司祭にやがてなること。同時にマリア様がいつも人々の傍らにいて御子に人々を導いたように、あなたもそのような道具になる、その第一段階です」と諭されました。

25年後の結果は、支えてくださった皆様の評価にお委ねいたします。還暦を迎える今年、この訓話が実を結ぶよう、新たに歩み始めます。

神様にすべてを感謝申し上げます。信者の皆様にはおわびと感謝を申し上げるとともに、今後とも、祈り支えてくださるようお願いいたします。

略歴　マリア会司祭。1957年12月1日京都市生まれ。河原町教会出身。92年9月23日河原町教会で司祭叙階。海星高等学校教諭、マリア会ローマ国際神学校、暁星小学校チャプレンを経て、小ヶ倉主任。

叙階式・選任式のお知らせ

叙階式　3月19日（日）午後3時　浦上教会
司祭叙階受階者　ペトロ　下原和希（土井ノ浦）

選任式　3月16日（木）午後1時30分　浦上教会
祭壇奉仕者受任者　ドミニコ　宮原大地（桐）
朗読奉仕者受任者　ヨセフ　青田憲司（浦上）
シモン　稲田祐馬（八幡町）

ぶどう園

▼信徒発見ミサ　3月17日（金）19時、大浦天主堂。
※召命祈願の意向も合わせて行います。

感謝
―香典返し―

長崎大司教区
●武田寿子様（本原）
故ペトロ武田五夫様
●牧山スミ子様（中町）
故ミカエル牧山一人様

長崎カトリック神学院
●浦上愛子様（滑石）
故パウロ浦上宏之様
●鳥瀬スヤノ様（上神崎）
故ヨゼフ鳥瀬秋雄様
●小田れい子様（奈留）
故テレジア葛島静子様

右の方々からご芳志を賜りました。お礼とご報告を申し上げます。

みことばにふれて 135
ツェリナ・スキビツカ修道女
けがれなき聖母の騎士 聖フランシスコ修道女会

ごく小さな事に忠実な者は、大きな事にも忠実である。（ルカ16・10a）

イエス様はその簡単な言葉を用いて、とても大事なことに私たちの注意を促してくださいます。

現代人は何か輝かしく、目を引きつけるものでなければ気が付きません。大きく意味のあるものが好きで、小さなものは、私たちにとって意味のない、重要でないもののように思いがちです。その結果、それを見逃したり、軽んじたりします。これこそ、イエス様が私たちに教えたいことです。小さな事を大事に思い、気を付けて、忠実に行う心を育ててほしいとの願いです。小さな事から大きな事が始まります。

イエス様はたびたび、小さなもの、ほとんど目に見えないような物をたとえ話の中で用いておられます。「からし種」「パン種」のたとえ（ルカ13・18～21）の中にありますが、からし種もパン種も本当に目立たないものですが、その働きの実りを見ないといけません。からし種は成長して鳥が巣を作るほど大きくなり、またパン種も小さなかけらを粉に混ぜると、やがて全体が膨らみ大きなパンができます。それと同じように私たちにとって、小さな事への忠実さ、時間だけが必要なのです。その小さな〝忠実さ〟〝時間だけ〟ということがもしかして〝そんなに大きな〟ということになるかもしれません。私たちは待つということがあまり好きではなく、すぐに何かを手に入れたいのです。

私も自分の努力、働きなどの結果が早く現れるようになりたいと思う人間の一人です。しかし、結果が一番大切なのではないと、いつくしみ深い神様が教えておられます。その時の苦労、努力こそが大事で、そのために捧げた時間も大切です。

ところが、日本に派遣されてきて4カ月足らずの私の今の生活は、その教えにぴったりと当てはまっているように思えます。どうしてですか？例えば、私たちの修道院にはたくさんの本があり、美しい表紙を見ると読みたいという気持ちでいっぱいになりますが、残念ながら、2千字ほどの漢字がすぐに頭に入るということは、まだ不可能なことです。食事中の姉妹たちの話、バスの運転手が何か言われる言葉なども、まだ全体的に分かりません。一つの言葉が分かったとしても、全体の意味が分かりません。ですから、ゆっくりと一つの漢字を覚えて次の漢字に、一つの言葉から次の言葉へと覚えていきたいと思っています。突然すべてを理解したいということではありません。どなたかが私の日本語での間違いだらけの文章を分かってくれた時の心に生まれる喜びは、とても大きなものです。私の忠実、困難、努力を主なる神への愛のために捧げながら、前進していきたいと思っています。神様は私の出す結果よりも、それを望まれておられると思います。

サン・テグジュペリ作の『星の王子さま』には次の言葉があります。〝かんじんなことは、目に見えないんだよ〟と。神様はまさに、それを見ておられるに違いありません。心を見ておられるからです。大きなものを探さず、私たちの毎日の小さな出来事を、より良く果たし、各瞬間を愛と喜びをもって過ごしたいと思います。その時、けがれなき聖母の御生涯に行われたように、私たちの上にも大きな事が行われるでしょう。

絆を修復する信仰者として
下五島と長崎南で合同堅信式

額に聖香油を受ける受堅者（福江教会）

下五島　1月15日（日）、下五島地区合同堅信式が福江教会で行われた。受堅者を見守る信者たちの熱心な祈りのうちに、中学生18人、成人2人が式に臨んだ。

ミサの説教で高見三明大司教は「戦争やテロ、いじめが世界にはあるが、それでも辛抱強く、イエス様のように神様との絆を修復する信仰者になってほしい」と励ました。樽角真穂（たるかどまほ）さん（中2、水ノ浦・楠原教会）が受堅者を代表して、信仰を育ててくれた家族や教会共同体に感謝を述べ、キリストの証人として生きていく覚悟を表明した。

ミサ後の記念撮影（中町教会）

長崎南　1月22日（日）中町教会において、長崎南地区の第2回合同堅信式が行われた。多数の信徒が参列する中、27人の受堅者（中学生25人、成人2人）が高見大司教から堅信の秘跡を受けた。

受堅者を代表してあいさつした山上寛司（やまがかんじ）さん（中2、中町教会）は、「僕はずっと教会が嫌いでした。……しかし、今日堅信を授かり、心新たに生きていく決心ができました。不安なことも多いけど、神様と共に乗り越えていきます」と力強く宣言した。

人
伝えたい思いを本に
長与教会信徒　山中 寛さん

昨年12月発行の『祈りの道をゆく――長崎巡礼』（監修・発行／まるちれす研究会）を著した。

「今私が存在するのは、先祖の信仰のおかげだと心から感謝しています。信仰を自分のところでとどめてはいけない、伝えていかないといけない。（本を）出版することはあまり考えていませんでしたが、伝えたい思いが書き残すことにつながったのかもしれません」

先祖は約200年前、大村藩外海の大野から現・五島市三井楽に移住した潜伏キリシタン。当時の大村藩は人口増加と土地が少ないという経済的な理由から、長男以外の男子を間引きする政策をとっていた。そのような中、6代前の先祖、ミカエル要助とマリアとわは、生まれた次男（山中さんの先祖）を手にかけず、家族で五島に移住したという。

「私は三井楽町で生まれ、岳（現・三井楽）教会で洗礼を受けました。長崎に住むようになってからもずっと長い間、先祖のかつての地、大野を訪ねたいと思っていました。実現したのは1975年8月30日。感無量でした。このことがきっかけで、その後、大村純忠が開港した横瀬浦港のある西彼杵半島、平戸、長崎、大村、島原半島……とたどっていったのです」

長崎南山学園の教職時代、若い頃は親や子どもたちの世話などもあってなかなか行けなかったが、休みの日を利用して各地を巡った。自分で調べたり各市町村に問い合わせたりして資料を集め、教会やキリシタン史跡を訪ねた。所属教会などの教会学校や評議会、女性部から巡礼案内を依頼されることもあり、「皆さんの感動の様子がうかがえて、こちらも励みになりました」。訪問先での触れ合いもあった。そういったことが先祖の地に始まって、自然と10年、20年、40年がたったという。

93年から2007年まで長崎地区カテキスタ養成委員や教区信仰教育委員を務め、教会学校で長年奉仕した。現在は直接携わっていないが、「子どもたちには単純に、面白く、多くのことではなく一つのことを深く……そういう心がけで接してきました」。

モットーは「信仰は聞くことから始まる」。妻・綾子さんと二人暮らし。84歳。

愛といつくしみで応えよう
教皇平和メッセージ＆コンサート

教区平和推進委員会主催の「教皇フランシスコ平和メッセージ＆神父さんとともに歌うコンサート」が、1月29日（日）午後2時からカトリックセンターで開催され、約200人が参加した。

名古屋教区の松浦悟郎司教による講演では、今年の教皇平和メッセージのテーマ『非暴力、平和を実現するための政治体制』を解説。「散発的な世界大戦」の中、非暴力をもって紛争地域で必死に抵抗し、平和の連帯の手をつなごうとしている人々がいる一方で、要職者や市民による差別的言動（ヘイトスピーチ）が拡大している現状などを紹介しながら、より大きな暴力や不正に対しては、より大きな愛、より大きな慈しみで応じなければならないとした（講演はhttps://youtu.be/jXYtrAsS3qUで視聴可）。

昨夏実施された沖縄平和学習の報告では、対馬丸事件など現地で学んだことを高校生らがスライドで説明、「戦争を語り継ぐことは、今を生きる私たちに託されている」と指摘した。

音楽の部では、長崎南山小学校コーラス部と「お告げのマリア修道会志願生＆稲田神父（浦上助任）」（写真）が出演、歌と演奏を披露した。

お知らせ

〈FAX番号の変更〉

湯江教会とコンベンツアル聖フランシスコ修道会湯江修道院の新FAX番号は、0957-32-5515です。電話番号は変更ありません。

短信

〈司祭団マラソン大会〉

1月31日㈫、28人が参加し、堂崎天主堂から福江教会までのコースで開催された。1位 川原昭如師（大司教館）、2位 竹谷 誠師（三井楽・貝津）、3位 平本義和師（天神）。

〈子ども・若者を支援する活動の集い〉

2月4日㈯カトリックセンターで、ドリーム・カム・ホームなど4団体が主催する「SOS緊急避難 子ども・若者 相談・支援ひろば周知活動」講演会が開かれ、活動の紹介とイエズス会の片柳弘史師の講演があった。

大槌ベースボランティア募集を終了

3月31日のカリタス大槌ベースボランティア宿泊所の閉所に伴い、ボランティア募集を終了させていただきます。これまでの皆様のご協力に、深く感謝いたします。

教区本部事務局（担当・松尾）

タンスの中身は入れたまま
責任ある安全運送!!
（見積り無料・荷造り発送も致します）
貨物保険有り
・一般引越　・小荷物
・荒ゴミ捨て　・遠距離
・学生引越　・ピアノ運搬
24時間営業・年中無休
受付時間 7：00～22：00
水浦運送
シモン 水浦 幹雄
長崎市上野町12－3
TEL(095)(代)847－7151
844－1420

2017年度 聖書講座・信仰養成講座のご案内

- 聖書講座（木曜日 19:00 ～ 20:30）
- 信仰養成講座・A年度（土曜日 19:00 ～ 20:30）

場　所　カトリックセンター2階講堂
受講料　聖書 13,000円　信仰養成 16,000円
＊聴講もできます（1回1,000円）
申込期間　3月21日（火）～ 4月19日（水）
申込先　〒852-8113 長崎市上野町10-34
教区生涯養成委員会
Tel 095-841-7731
Fax 095-841-7732
詳細は小教区にお配りしている案内をご覧ください

砕石・栗石・港湾用捨石一式生産販売
たつみ産業株式会社
西田商事株式会社
代表取締役 ミカエル 西田 剛
本社　〒857-1166 佐世保市木風町1468番地
TEL（0956）31－8268

長崎カトリックセンター前　長崎市上野町1-5　TEL 095-845-6175
医療法人 平田クリニック
院長 ヨゼフ 平田哲也
内科・循環器科・入院可
通所リハビリテーションあり